

タカハシカズミヲシッテイルカ

風でちぎれ飛んだ落ち葉が雨に濡れてアスファルトにへばりついている。民家の庭に植えられた柿の木は、もぎ取る人もなく寒風に実を揺らしている。晩秋は初冬への垣根を知らぬ間に通り過ぎたようだ。

「シンイチ、タカハシカズミヲシッテイルカ？」高校1年だった頃に2年上の先輩が帰りの電車の中で聞いた。「え、巨人軍の投手ですか？」当時、高橋一三というピッチャーがジャイアンツにいた。「バーカ、ソウジャナイヨ。」

その先輩にはいろいろなことを教えられ、様々なことを学んだ。「イワナミシンショヲ、1シュウカンニ1サツズツヨメ。」当時岩波新書は、★のマーク1つが30円位だっただろうか、5個でも150円で手に入った。高校1年生には難しくて訳がわからなかったが、高橋和巳を読み、岩波新書を読んだ。

いささか乱暴な読み方であったが、それが様々な本と出会うきっかけになった。誰にも、忘れられない本との出会いがあるだろう。夜が更けるのも忘れて読書に耽溺した経験は誰もが持っているはずだ。良い本は私たちを捉えて離さない。感受性の鋭い高校時代に出会った本は、少し大げさに言えば人生を変えてしまうほど大きな力をもって、生涯そばに在り続ける。



高校2年生たちが国語の授業で漱石の「こころ」を読んでいた。Kはなぜ死を選んだのか。教師の問に生徒たちは思いを巡らせ、懸命に考えていた。その時に出した答えは、時間とともに、経験とともに変化し、深まっていく。小説から想起されるエゴイズムや倫理観といった言葉が、意識されるにせよされないにせよ心の中に根拠をもって、時間とともに枝葉を広げて成長していくだろう。

本を読むということは、一面では樹を植えることに似ている。読後に得たほとんど意識できないような小さな種子や、弱々しい苗のような想念が心の中に植えられて、時間とともに大きく育って豊かな森を形成する。その森は多様性に富み、様々な生命を宿らせている森だ。こんこんと水のわき出る泉ももっているだろう。

そのような森もっている人は、いつでも自らの中にみずみずしい緑を湛え、時折吹き荒れる暴風雨もしなやかに受け止めて、雨はむしろ泉の水源になる。豊かな森もっている人は疲れた人を憩わせ、水を与えてもう一度歩き出させてやることもできよう。

国語の教科書に載っている夏目漱石であれ森鷗外であれ、彼らの作品にじっくりと向き合ってみるといい。高校時代はおそらく人生の中でもっとも読書に適した時期だと思うから。折しも、読書の秋である。